

# トランスジェンダー をいきる

(19)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

## 牛若孝治

### 名前と自称詞（後編）

#### 1 始めに

今回は、「名前と自称詞」の後編として、体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性である筆者が、戸籍上男性名を取得したことで、どのような自己変革をしていったかについて詳述する。その自己変革の過程で、名前と言うものが、いかに自己にとって重要であったかに気づかされる。それまで忌み嫌っていた「泣く」ということを再評価した上で、「男泣きに泣く」ということを反復経験することで、さまざまな場面で今までとは異なった視点に出会う。

なお、名前を変更することを一般的には「改名」というが、本稿では「(男性名に) 戻す」と表現する。「改名」という言い方は、女性から男性に「変える」というニュアンスが強い。社会的にみれば確かにそうだが、筆者の立場としては、もともとジェンダーが男であるため、そのような自己に女性名を付与したこと事態が間違っている、だからジェンダーが男である筆者には、男性名を付与しなおすのは当然、という考え方から、「(男性名に) 戻す」と表現することにしたのである。

#### 2 「男泣きに泣く」というプロセスを反復経験することによって自覚した男性としてのアイデンティティー確立

男性名である「孝治」という名を通称名として使用したころから、急速にこの名前への親近感が沸き、友人たちとの関係も良好になってきた。また、通称名として使用した名前が、約8ヶ月ほどで公的に承認されたのは異例の早さであったことは、筆者が行っている自助グループの人たちの話で明らかになった。

公的に男性名が認められて以降、しばらくの間、「男泣きに泣く」日々を送った。それは、一人きりの自宅であっても、友人に男性名に戻したことを知らせる手紙を書いている、また自助グループや各種コミュニティの中で男性名に戻したことを知らせている際も、名前のお話になると、ひとりでの涙がこみ上げてきた。そのような中で、一人私と一緒に涙を流しながら喜んでくれた男の友人がいた。在日朝鮮人の彼は、日本名から朝鮮名に戻すために、約20年間裁判で戦った

という経歴を持っていた。そのため、筆者の名前が公的に男性名に戻ったことを喜んでくれた。

彼との出会いを通じて、筆者は子供時代を振り返る。なぜ、在日韓国・朝鮮人には、日本名と朝鮮名の2つの名前を持っている人たちがいるのか、彼ら・彼女等は、なぜこの2つの名前の間でもがき苦しむ必要があるのか、なぜ私には1つの名前しかなく、それもなぜ女性の名前が付けられているのか、、、。彼との出会いの中で、私は子供のころから、名前にこだわっていたこと、を思い出したのである。

このようにして、あちこちで男泣きに泣きながら男性名に戻したことを知らせていたとき、あることに気づかされた。それは、自己の名前を公的に男性名に戻したことによって、通称名として使用していたときと比較して、更に男としてのアイデンティティーが確立してきた。しかも、その確立の仕方は、ただ男性名に「戻した」というだけに留まらず、「男は強くたくましく、人前で涙を流さない」という、従来の自己の男性性への疑問を呈するようになった。特に、「人前で泣く」という行為は、悪しきもの、恥ずべきこととして忌み嫌い、排除してきた筆者が、「男泣きに泣く」という経験を繰り返したことで、「泣く」という行為への恥ずかしさが少しばかり軽減してきた、といえるだろう。

### **3 産婦人科への通院時に気づいた「ある異変」**

公的に男性名に戻し、「男泣きに泣く」というプロセスが一段落したある日、性同一性障碍の診断に必要な要件に関わって産婦人科に通院したとき、ある異変に気づいた。

待合室で待っているときである。女性ばかりの患者の中に、男の私が一人ぽつんといるような心理状態には変わりはない。だがそのような状況の中で、次のような疑問が沸きあがってきた。妊娠している人、子宮・卵巣・乳房などの婦人科疾患を持っている人、不妊治療を受けている人など、一つの待合室にランダムに集められているが、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているのではないか、ということである。つまり、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているとすれば、何らかの理由で子どもを望んでも産めない人、中絶を余儀なくされている人、そもそも子どもを望まない人など、「社会が規定した産む性」にアクセスできない、アクセスしたくない人たちが、妊娠している人たちと待合室を共にすることが、彼女たちにどのような心理状態をもたらすのかということである。では、なぜそのような疑問が沸きあがってきたのか。機能異常のない子宮・卵巣・乳房を有している筆者の身体が「女性であるから」ではなく、そのような自己の身体と「孝治」という自己の男性名との間に一定の距離ができたことで、新たな思考変動によって、従来嫌悪していた女性たちへの共感を示す余裕が生まれてきたからかもしれない。今までただ嫌悪していた「産婦人科」という場に改めて焦点を当ててみたとき、それまで気づかなかった産婦人科の不備な点や残酷な一面が見えてきたといってもよいだろう。

### **4 男性名を武器として使用することによる、他者の視聴覚的自明性の崩壊へ**

名前を公的に男性名に戻したとはいえ、現時点ではホルモン療法や手術療法といった医学的治療を受けていない筆者の姿は、他者の視聴覚レベルでは女性であると規定される。しかし、だか

らといって、そのような他者の視聴覚レベルで、自己の性別を勝手に規定されてよいはずがないと筆者は考えている。いや、かえって他者から不用意に自己の性別を規定される行為は、筆者にとっては不条理である。そこで筆者は、他者からのこのような不条理な扱いを是正するための役割を果たしているのが、やはり自己の男性名である。この場合、上記2つの自己の男性名の意味する事柄とは異なり、他者から女性として規定された場合の武器弾薬としての意味が含まれている。すなわち、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者への行動として、自己の男性名を文字情報として提示することによって、他者が筆者の体を視聴覚的に規定した女性という性別と、文字情報として提示した男性名である「孝治」という名前との間で右往左往し、著しく混乱を起こし、ひたすら謝っている姿は、筆者からしてみると、自ら男性であることを証明するという役割を果たしたことになるだろう。それだけではなく、視聴覚レベルで自己を女性と規定した他者の自明性をも崩壊させるという構造をなしている。このような戦法で自己を女性と規定した他者と向き合ったとき、視聴覚レベルでの自己の性別と、文字情報で提示した名前の性別との不一致に不安を抱いたり、ひたすら謝っている他者に対して、個々人の視聴覚を疑うことなく他者の性別を規定する権利はないということをととと語り、また、個々人の視聴覚を疑わないことそれ自体に「障害があること」などをことごとく主張した上で、そのような他者の前でひたすら「勝利感」を抱いている筆者の存在は、ともすればそれでも、何がしかの疑問を抱いているかもしれない他者からすると、納得がいかない奇異な存在に思えるかもしれない。それでも筆者は、他者の視聴覚レベルによる自明性を根底から崩壊させたという目的達成によって、自己の男性名が他者への武器弾薬として他者に正しく認識されたと筆者が認識したとき、他者が筆者の前でひたすら謝りながら、個々人の視聴覚レベルの未熟さや恥を、筆者の前で露呈させたことへの反省の言葉や態度を筆者が目当たりですることができたということへの優越性が「勝利感」へと繋がっていくのであると筆者は信じている。

ただし、このような目的達成を得るためには、「孝治」という筆者の名前が男性名であることを、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者との間で共通認識があること、戸籍の性別が女性であるため、住民票や保険証などの戸籍と連動している公的書類の提示を不可とし、性別記載が男性であるものまたは性別記載がない書類に限ることに留意しなければならない。

## 5 終わりに

「やっと、自分の名前に誇りが持てるようになりました」と、堂々と胸を張って言える様になったのは、公的に男性名に戻して1年も経つか経たないかぐらいだっただろう。その一方で、「あなたのように名前にこだわるのはおかしい」と言われたこともあった。だが、筆者は言う。「名前とは人格である。だから、自分の名前にこだわるのは当然。名前で苦しみ、名前で苦勞した分、その後の喜びはどれだけ金を積んでも買えるものではない。だから俺は、これからも自分の名前に誇りを持って生きていきたい」。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）